

2024.10.7



れた1937 (昭和12)

年、つまり中国北京郊外の蘆溝橋で日中戦争が始まった年に、大本営直轄の秘密軍事技術研究所としてここに移転してきま

戦前から戦中にかけて米軍のB29爆撃機による猛烈な空爆や原子爆弾でこの研究所は、総力戦としての日中・日米戦争のためのさまざまな謀報(スパイ)活動、防諜、謀略、宣伝(プロパガンダ)活動や、それらのための特殊技術の開発、さらに、細菌・化学兵器の開発、偽札・偽パスポートの製造などに従事して

「アメリカ本土を攻撃せよ！」

旧日本軍の風船爆弾と原爆計画

明治大学が買収し、現在は生田キャンパス(理工学部、農学部)となっており、その一角に「平和教育登戸研究所資料館」が2010年に開設され、さまざまな貴重な資料約6000点が五つの展示室に展示されています。

今回見学した資料館の一室には、この風船爆弾の10分の1のレプリカが展示されています。実際に製造されたのは、直径10センチほどの大きな風船で、その中に水素ガスを詰め、爆弾や焼夷弾を数個ぶら下げて、大気高層のジェット気流(偏西風)に乗せて、太平洋を横断し米国本土を攻撃しようとしたものです。

これらの中で、とくに有名なのは、日米戦争末期に開発された「風船爆弾」です。今の若い人たちは、日米戦争で日本は、

和紙をコンニャク糊(のり)で何重にも張り合わせたもので、その作業には全国の女子学生が多数動員されました。ちなみに、私の郷里に近い愛知県豊川市には当時東洋一と言われた海軍工廠(こうしょう)があり、海軍用の機関銃、爆弾、銃砲弾などを製造していましたが、終戦直前に米空軍のB29による大爆撃を受け、工場施設は全滅、そこで働いていた工員や地元的女子学生が多数死亡しました。正門の守衛とし

戦前から戦中にかけて米軍のB29爆撃機による猛烈な空爆や原子爆弾でこの研究所は、総力戦としての日中・日米戦争のためのさまざまな謀報(スパイ)活動、防諜、謀略、宣伝(プロパガンダ)活動や、それらのための特殊技術の開発、さらに、細菌・化学兵器の開発、偽札・偽パスポートの製造などに従事して

て勤務していた私の父親も九死に一生を得ました。(2面に続く)

前回触れましたように私はこの一年半ほど、東京・世田谷から少し離れた川崎市麻生区百合丘に仮住まいしていますが、この近く、小田急線で2駅目の生田(いくた)にかつて旧日本軍の「陸軍登戸研究所」がありました。前から一度その遺跡を見学しておきたいと考えていたので、9月の猛暑の一日、訪問してきました。今回はそのお話をしましょう。

秘密に包まれた登戸研究所

この研究所は、私が生ま



旧陸軍登戸研究所を訪問する筆者(9月)

研究所資料館に展示されている風船爆弾の模型(実物の10分の1)



太平洋の上空をいく風船爆弾

令和つれづれ草

金子熊夫

約100発が米本土に到着

■1944年秋から45年8月までの間に登戸研究所で製造された風船爆弾は総計1万発弱。千葉県一ノ宮・茨城県大津、福島県勿来の各海岸からアメリカ本土に向けて発出されました。そのうちの10%程度に相当する1000個近くがアメリカ本土やアラスカ、カナダに到達したとされます。

これらの風船爆弾は、2昼夜半かけて太平洋を横断しましたが、夜になると大気高層では零下50度ほどの気温になり風船の高度が下がるので、積んでいたバラストを落として、軽くして高度を上げるなどの細かな工夫が施されていたようです。そして米国の本土上空に達すると一定の高度で爆弾や焼夷弾を投下するような仕組みになっていた。

「戦果」は死者6人

問題は、これらの風船爆弾が実際にどれだけの「戦果」を挙げたかです。が、確実な情報としては、米国西海岸のオレゴン州

米政府による情報隠蔽

アメリカ政府と陸軍は、自国民がパニックに陥り、戦意に悪影響が起ることを恐れて情報操作を行い、国内のマスメディアに対して風船爆弾に関する報道を一切禁止したようです。こうしたアメリカ側の隠蔽(いんべい)工作によって日本側では風船爆弾の具体的な戦果を知る事ができず、その効果を疑問視する声が軍部内にあつたとされています。

1945年夏になると米軍の本土空爆が一段と激しくなつたので、登戸研究所の一部は、長野県松代(この山中には、大本営や皇居、政府首脳部などの地下施設が建設されていた)へ移転し始めていたが、終戦ですべて中止。当時の極度の混乱状況が想像できます。

こうして日本が、登戸で、乏しい資材をかき集めて必死に風船爆弾を製造していたころ、米国内

その他の米本土攻撃作戦

風船爆弾は、日米戦争末期の日本軍による苦肉の奇策でしたが、実は戦争の初期段階では陸海軍による米本土攻撃作戦がいろいろいろいろな形でまわられていたわけで、今思っても、彼我の実力のあまりにも大きな格差にがくせんとします。物量の絶対的不足を精神力でカバーし、B29の攻撃に「竹やり」で対抗しようとした当時の日本人の姿にはむなしさ、痛ましさを感

「アメリカ本土を攻撃せよ！」

じますが、そこに特攻隊員にも似た日本人の心意気を感じるのは、精神的な「戦中派」を自認する私の感傷かもしれませ

オレゴン州に焼夷弾

果敢水上機で強行爆撃

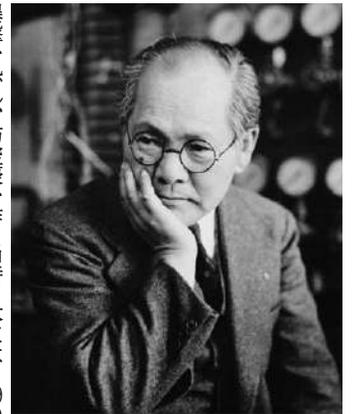


オレゴン州空襲を伝える朝日新聞の記事(1942年9月17日付)

この攻撃は米政府や一般市民に大きな衝撃を与えたとされています。なにせ、米本土が外国によって直接攻撃されたのは米英戦争(1812~15年)以来だったからです。その後も日本海軍は潜水艦による西海岸への砲撃を累次にわたって行ってたよつで、米軍上層部は大規模な日本軍の上陸は避けられないとして、日本軍を上陸後ロッキーマウンズで十分に失敗させ、原爆製造には至りませんでした。

日本による原爆製造計画 原子爆弾といえば、もつぱら米国の「マンハッタン計画」が有名ですが、実は日本にも原爆製造計画があつたことは今や周知の事実です。陸軍は理化学研究所の仁科芳雄研究室に、海軍は京都帝大の荒勝文策研究室に委託していましたが、肝心のウラン鉱石が十分入らず、原爆製造には至りませんでした。

北朝鮮の臭い風船爆弾? 戦後間もなく80年。いまや戦争のやり方も、使用される武器もすっかりさま変わりしましたが、現在進行中のウクライナ戦争やガザ紛争を見るにつけ、狂気に陥つた独裁者がやることは昔も今も常軌を逸しており、何を



日本の原子物理学の父、仁科芳雄博士

でかすか分かりません。そうであれば、私たちが平和を維持するためにこそ、戦争の実態をもっと具体的を知る努力をすべきではないか、そして、戦争を抑止するための相応の自衛力を持つべきではないかと思えます。登戸研究所からの帰り道に改めてそう感じました。最後に蛇足ながら、最近北朝鮮は韓国側からの宣伝放送に對抗して、風船による攻撃を繰り返しているようですが、爆弾の代わりに人糞などの汚物を搭載しているとか。これは殺傷力はないもの、はなはだ臭い話である、はなはだ臭い話である、

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元国連環境計画(UNEP)アジア太平洋地域代表、日本国際問題研究所研究局長、元外務参事官。退官後東海大学教授(国際政治学)、現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、87歳。kaneko@eeecom.org (コメント、ご感想歓迎) 本欄のバックナンバーはすべて次のサイト(http://www.kanekokuma.o.jp/)で自由に閲覧できます。